

Title	明治初期社会経済思想文献大要
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.5 (1936. 5) ,p.745(159)- 782(196)
JaLC DOI	10.14991/001.19360501-0159
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360501-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

之を以て觀ると本書は著者が海上保険に關する經濟的・法律的及び經營的諸問題を總て取扱ふに努めたと云ふ抱負は十分に實現せられゐるのみならず、殊にあらゆる機會に於て法規と約款を和文のみならずイギリスのものに就ても參照を怠らず且つこれに直截なる解説を施してゐる。斯の如くして本書は實に初めて海上保険を學ばんとする者にとりてよき入門書たるに止らず實務家にとりても亦恰好の手引草である。

本書は現型に於て勿論獨自の存在理由を有するものであることは以上の所言を以てしても判るであらう。併しこれよりも一層詳細なる著者の海上保険大系若しくは幾卷かの海上保険研究の型に於て著者が多年の蘊蓄を傾注して世に問ふの日の近からんことを禱る者は獨り記者のみではあるまい。(椎名幾三郎著『海上保険概論』東洋出版社、昭和十年十一月刊、定價一圓八十錢)

明治初期社會經濟思想文献大要

加田 哲 二

小引

明治初期の社會經濟思想發展の概觀については、既に本誌において、記すところがあつた。(拙稿 明治初期社會經濟思想史への序論 本誌 昭和十一年四月號)いまこれに對應して明治初期社會經濟思想文献について、記さんとするものであるが、明治初期の廣汎な文献を一々記載することは、紙幅の關係においても、また筆者の能力においても、許されないのであるから、主として筆者が、この數年間研究の目的をもつて蒐集し得た文献を中心としその他若干の重要文献を記載する方法を採らうと思ふ。而して、分類の方法は、筆者が前掲論文において採用した思想史研究方法に照應して、思想家別研究方法と類型的思想分類方法によ

明治初期社會經濟思想文献大要

つて、行かふと思ふ。かくて、これに二三の解説を加へることによつて、一は自己の記憶に便し、他は研究者の便宜に應じたいと思ふ。而して、時期に關しては、當然幕末から始むべきであるが、この點は詳細に涉らず、明治初期との關係の深いものに限定することとし、この時期から日清戰爭直前にまで及ぶ筈である。たゞ社會問題に關するものは、日清戰後の時期にまで及んで記載することが、その發展を概觀する上において便利であるから、それは例外として、その時期にまで及ぶこととする。

目次

小引

一 文献目錄

- 二 複製及び編纂
- 三 主要思想家の著述
- 四 外國書翻譯(明治十年以前)
 - 經濟關係書
 - 政治關係書
- 五 文明開化論
- 六 保守反動の思想 佐田介石
- 七 自由民権
 - 中江篤介
 - 自由民権譯著書
 - 自由民権反對論
 - 民権運動に關する著書
- 八 演説・文集
- 九 國會論
- 一〇 政治翻譯書
- 一一 スペンサー翻譯
- 一二 社會學書
- 一三 經濟書翻譯
- 一四 經濟問題著述
- 一五 國家主義

- 一六 條約改正及び内地雜居
- 一七 基督教問題
- 一八 社會問題
- 一九 婦人問題
- 二〇 日本の史的考察
- 二一 征韓論・西南役・朝鮮問題
- 二二 文明又は政治小説
- 二三 雜

一 文獻目錄

明治初期文獻の研究に際して必要なものは、文獻目錄であるが、これは、その數決して多いとはいへぬ。最も廣汎なものは、

一 高市慶雄篇 明治文獻目錄 昭和七年刊

であらう。これは、社會科學文獻の科目別並に著者別分類を行つてゐる有用なものである。これに次いで、「明治文化全集」各卷の末尾に附けられてゐる「文獻年表」である。これは、各専門家の筆になつてゐるだけに、重要なものは、殆んど記載されてゐる貴重なものである。なほ特殊文獻の研究書としては、

二 齊藤昌一編 現代筆禍文獻大年表 昭和七年刊

があり、筆禍文獻の研究として、「新聞・雜誌・一枚刷等」にまで及んでゐる最も詳細な研究である。なほ、社會思想・社會主義に關しては次の二書がある。

- 三 大原社會問題研究所編 日本社會主義文獻 第一輯 明治十五年より大正三年に至る 昭和四年刊
- 四 細川嘉六 日本社會主義文獻解説 日本資本主義發達史講座第四部 明治十三年より昭和二年に至る文獻解説 昭和七年

この二書は社會主義文獻に限定されてゐるが、この方面の研究にとつては、極めて便利である。なほ

- 五 堀 經夫著 明治經濟學史——自由主義・保護主義を中心として——昭和十年刊

の第一章總論 第一節資料は八三頁に渉る文獻解説である。筆者は、この「明治經濟學史」をこの文獻解説において、他の部分よりも重要な價值を認めるものである。その他現代の研究家の著作には、多かれ少かれ、社會經濟思想文獻の解説がなされてはゐるが、この「文獻大要」の目的が原資料を擧げることと目的とするが故に、こゝに省略し、別稿「明治初期社會經濟思想研究文獻」に譲ることとする。

二 複製及び編纂

一般に思想史研究において、原資料を得ることは、極めて必要であるが、原資料の蒐集は極めて困難な場合が多い。幸ひ原資料を手にする事が出来ても、これを多數に集めることは極めて難事業であるといはねばならぬ。もし、この場合原資料の複製・再刷が行はれ、それが容易に何人の手にも入り得る状態が作らるゝとすれば、學界に對する大なる貢獻といはざるを得ない。故瀧本誠一氏の「日本經濟叢書」三十六卷(後の「經濟大典」五十一卷)が徳川時代の經濟思想史または經濟史に對する貢獻の大であつたことを想起すれば足りるであらう。明治文化の研究に對するかゝる役割は、故吉野作造氏の努力の結果である。

六 明治文化全集 第二十四卷

によつて果たされてゐる。明治文化全集は明治文化の各方面における文獻の蒐集・解題であつて、明治文化または思想史の研究の廣く利用し得るものである。それは、左の諸篇に別れてゐる。

- 第一卷 皇室篇 雲上正鑑外十九篇 昭和三年刊
- 第二卷 正史篇 明治政史 上 昭和四年刊
- 第三卷 正史篇 同下 外六篇 昭和四年刊

明治初期社會經濟思想文獻大要

第四卷	憲政篇	公議所法則案外十二篇	昭和三年刊
第五卷	自由民權篇	自由之理外十五篇	昭和二年刊
第六卷	外交篇	井上特派全權大使復命書外十七篇	昭和四年刊
第七卷	政治篇	鄰草外十四篇	昭和四年刊
第八卷	法律篇	泰西國法論外九篇	昭和四年刊
第九卷	經濟篇	萬國政表外二十五篇	昭和四年刊
第十卷	教育篇	大小學校建議外十四篇	昭和三年刊
第十一卷	宗教篇	神教要旨略解外二十二篇	昭和三年刊
第十二卷	文學藝術篇	修辭及華文外廿二篇	昭和三年刊
第十三卷	時事小説篇	冠松貞士夜暴動外十篇	昭和三年刊
第十四卷	翻譯文藝篇	和蘭美政錄外十一篇	昭和二年刊
第十五卷	思想篇	新論外十五篇	昭和四年刊
第十六卷	外國文化篇	玉石志林外十三篇	昭和四年刊
第十七卷	新聞篇	官板バタビヤ新聞外十二篇	昭和三年刊
第十八卷	雜誌篇	西洋雜誌外十八篇	昭和三年刊
第十九卷	風俗篇	西洋將基指南外十九篇	昭和三年刊
第二十卷	文明開化篇	文明開化外十四篇	昭和四年刊
第二十一卷	社會篇	高島炭坑問題外九篇	昭和四年刊
第二十二卷	雜史篇	耶蘇結末記外十七篇	昭和四年刊
第二十三卷	軍事篇	五 交通篇 三	昭和五年刊
第二十四卷	科學篇	寫真鏡圖說外十五篇	昭和五年刊

明治文化全集は明治文化に關する最も廣汎な文獻蒐集であつて、吉野作造氏の努力に對しては深甚の感謝を表

さねばならぬ。勿論この全集に漏れた著名な譯著書がない譯ではない。故に、明治思想の研究者は、この全集にのみ依據することは出来ぬ。しかし、文獻蒐集の勞力を大半節約し得る點において、また各文獻の關する精細な解題を附した點において、研究者はこの文獻を缺くことは出来ぬ。明治の著名な文獻を記録したことは、この明治文化全集に始まるのではない。博文館創業二十週年紀念發兌の

七 明治名著集

太陽臨時増刊 第十三卷第九號

の如きも、その一つであらう。それは、明治における最も著名なる著述・最も影響力を持つた著述を記録してゐる。その内容は左の如きものである。

福澤 諭吉	學問のすゝめ	明治五年一九月刊
西 周	百一新論	明治七年刊
田口 卯吉	日本經濟論	明治十一年刊
加藤 弘之	人權新説	明治十五年刊
中江 篤助	民約解釋	明治十五年刊
島尾小彌太	王法論	明治十六年三月刊
井上哲次郎	倫理新説	明治十六年三月刊
馬場 辰猪	天賦人權論	明治十六年一月刊
藤田 茂吉	文明東漸史	明治十七年刊
伊藤 圭介	救荒植物集説	明治十七年刊

八 東天紅

明治新聞雜誌文庫所藏目錄 正篇

九 同 續篇

昭和五年七月刊
昭和十年十月刊

新聞の複製もまた甚だ望ましい。前掲明治文化全集には「新聞篇」「雜誌篇」があり、重要な新聞雜誌が記録されてゐる。この方面には、明治文化研究會、殊に尾佐竹猛氏の努力になる

一〇 幕末明治新聞全集

がある。この新聞全集は、全十卷の豫定であつたが、現在まで刊行されたものは、左の五卷で、その以後久しく中絶してゐる。續刊せられんことを希望して止まない。

第一卷	文久より慶應まで
第二卷	日本貿易新聞・横濱新聞・中外新聞紙・香港新聞紙・日本新聞紙
第三卷	官板バタビヤ新聞・官板海外新聞・ヒコ海外新聞・萬國新聞紙
第四卷	慶應四年・明治元年
第五卷	海外新聞別集・各國新聞紙・中外新聞・日々新聞・曾よ吹く風・日新通志
第六卷	もしほ草・江湖新聞・内外新報・外國新聞・のりあひばなし
第七卷	東西新聞・浮世風聞・公私雜報・都鄙新聞・此花新聞・諷歌新聞・海陸新聞・内外新聞・海外新聞・新聞事略

明治初期社會經濟思想文獻大要

坪内 雄藏、小説神髓 明治十八年刊
外山 正一、社會改良と耶蘇教との關係 明治二十年刊
西村 茂樹、日本道徳論 明治二十年刊
徳富猪一郎、新日本の青年 明治二十年刊
中村 正直、漢學不可廢論 明治二十年刊
同、思想を管理する要を講ず
明治初期文獻の再刻がいまだ多く問題となつてゐなかつた當時において、これだけの名著を兎に角一冊に纏めたことは、その意圖において、見るべきものがある。明治文化全集の出版されてゐる今日においては、解題もないこの文獻集は、一般の用には役立たないものであらうが、自國の歴史の殆んど顧みられなかつた當時における勞作としては、見るべきものであらう。
何れの文化の研究に際しても、必要なものは、新聞であらう。しかるに新聞は日々發刊せらるゝものであり、その日その日の翻讀によつて一應用済みとなるので、これを保存する人は案外に少い。従つて、數十年後において、當時の新聞を蒐集し、または翻讀することも、甚だ困難である。明治初期の新聞類に至つては、なほ更らその感が深い。幸ひ、東京帝國大學法學部所屬の明治新聞雜誌文庫は明治の新聞雜誌の保存について、最も完備した文庫である。この文庫の所藏目錄がある。

右五卷が昭和九年十月から昭和十年二月までの間に刊行されて、以後は中絶の姿となつてゐる。是非續刊されたいものである。この中、

一一 横濱新報 もしほ草 江湖新聞

が、明治文化研究會藏版、小野秀雄校として、大正十五年に刊行されてゐる。前記の明治新聞雜誌文庫所藏新聞を事件別に編輯して、明治史の大體を示さうとするものに、

一二 新聞集成 明治編年史 全十五卷

が、目下刊行されつゝある。これは「新聞全集」が新聞そのまゝを編輯してゐるのに對して、古新聞の再編輯であり、この再編輯によつて、明治編年史體のものを作成しやうとするものである。従つて、新聞全集では一新聞の全内容とその傾向を知ることが出来るが、この新聞集成明治編年史では、それは犠牲にされてゐる。その代りに、新聞全集に得られない歴史の傾向をこゝに求めることが出来る。十五卷の内容は次の如きものである。

- 第一卷 維新大變革期 文久二年—明治五年
- 第二卷 民論勃興期 明治六年—九年六月
- 第三卷 西陲擾亂期 明治九年七月—十一年
- 第四卷 國會開設運動期 明治十二年—十四年
- 第五卷 民論大彈壓期 明治十五年—十七年

- 第六卷 歐化政策期 明治十八年—二十年
- 第七卷 憲法發布期 明治二十一年—二十三年
- 第八卷 國家搖籃期 明治二十四年—二十六年
- 第九卷 日清戰爭期 明治二十七年—二十九年
- 第十卷 東洋問題多難期 明治三十年—三十二年
- 第十一卷 北清事變期 明治三十三年—三十五年
- 第十二卷 日露戰爭期 明治三十六年—三十八年
- 第十三卷 戰後國勢膨脹期 明治三十九年—四十一年
- 第十四卷 日韓合邦期 明治四十二年—四十五年
- 第十五卷 明治大索引

この他新聞記事の集成せられたものは數種ある。筆者の偶目し得たものを挙げれば、次の如きものがある。

- 一三 近代世相全史 慶應より大正までの新聞重要記事集成 四冊 梅原北明編 昭和六年刊
- 一四 新聞に現れた明治の大事事件記録集成 石田文四郎編 昭和五年刊
- 一五 新聞雜誌に現れた明治時代文化記録集成 石田文四郎編 前編1—20 昭和九年刊
- 一六 天狗騒ぎ 横濱夜雨編 昭和三年刊
- 一七 太政官時代 横濱夜雨編 昭和四年刊
- 一八 明治初年の世相 横濱夜雨編 昭和二年刊

明治政府の官報として、刊行されてゐたものに「太政官日誌」がある。太政官日誌は慶應四年から明治九年まで刊行されてゐるが、明治初年の政府の施設を知るため

には是非参照せねばならぬものである。幸ひにして、その複刻がある。

一九 維新日誌 橋本博編輯 第一期十卷昭和七年—昭和八年刊
二〇 維新日誌 第二期十卷 昭和九年刊

その内容は、次の如きものである。

- 第一卷—太政官日誌 (慶應四年、明治元年) 第一—九八 昭和七年刊
征行幸中 行在所日誌第一—七號 (慶應四年) 昭和七年刊
- 第二卷 太政官日誌 明治二年 第一號—第一二二號 昭和七年刊
- 第三卷 太政官日誌 明治三年 第一號—第六九號 昭和七年刊
- 第四卷 太政官日誌 明治四年 第一號—第四一號 昭和七年刊
- 第五卷 太政官日誌 明治四年 第一號—第一一六號 昭和七年刊
- 第六卷 太政官日誌 明治四年 第一號—第一一六號 昭和七年刊
- 第七卷 太政官日誌 明治四年 第一號—第一一六號 昭和七年刊
- 第八卷 太政官日誌 明治五年 第一號—第一〇六號 昭和八年刊
- 第九卷 太政官日誌 明治六年 第一號—第一六六號 昭和八年刊
- 第十卷 太政官日誌 明治七年 第一號—第一七七號 昭和八年刊
- 第十一卷 太政官日誌 明治八年 第一號—第二五號 昭和八年刊

明治初期社會經濟思想文獻大要

第十卷 太政官日誌 明治八年 第二六號—第一五二號
太政官日誌 明治九年 第一號—第九〇號 昭和八年刊

維新日誌第二期十冊の内容は次の如くである。

- 第一卷 朝報摘要 慶應三年十月—明治七年十二月・江城日誌 慶應四年五月五日—五月三十日・鎮台日誌 慶應四年六月一日—七月二十七日・鎮將府日誌 慶應四年七月二十七日—明治元年十月
- 第二卷 東京城日誌 明治元年十月—明治二年三月・東巡日誌 明治元年九月—十月・還幸日誌 明治元年十二月・上野實戰記 阿部弘藏手録・遊擊軍將府日誌 乾坤慶應四年・苟生日記 杉浦清介・伊地知正治日記・慶應兵謀秘録八卷 源惠親・各藩戰功錄 乾坤
- 第三卷 三條西季知日記 文久三年—慶應三年・御手留日記 慶應三年十月三日—明治元年二月十二日 伊達宗城・丁卯日記 慶應三年十月十三日—十二月晦日 中根雪江・議定官日記 明治二年一月十八日—三月五日・議政官日録 明治二年四月一日—六月四日・公議所日誌 明治元年二月—明治二年六月・集議院日誌 明治二年七月—明治三年十月十七日
- 第四卷 筑波山紀聞 櫻井倫常 文久三年十一月二十日—元治二年四月八日・倫常私記 櫻井倫常 嘉永六年八月二十四日—慶應二年九月十九日・内閣秘本 處恭趣旨書 藩地事務局
- 第五卷 近世事情 對灣野史等・近代月表 弘化元年—慶應三年 鈴木大・告諭大意 京都府・明治御法度書・歸農始

明治初期社會經濟思想文獻大要

末 中田のぶ實

- 第六卷 明治元年一月—同八年六月決算報告 大隈重信・明治八年・九年 日本政表・慶應四年官員錄・明治元年官員錄・明治二年地下次第・明治三年女房次第・職員表 慶應三年—明治六年
- 第七卷—第十卷 憲法史料

明治初期の財政經濟に關する調査で、久しく官府の書庫に藏されてゐたものを印刷したもので纏つたものは、

二一 大藏省編纂 大内兵衛・土屋喬雄校

明治前期 財政經濟史料 二二卷

がある。その内容は左の如し、

- 第一卷 理財稽蹟 松方伯爵財政論策集 昭和八年刊
- 第二・三卷 大藏省沿革志 上下 昭和八年刊
- 第四・五・六卷 歳入出決算報告書 上、中、下 昭和八年刊
- 第七卷 地租改正報告書地租改正例規沿革提要地租關係書類 昭和八年刊
- 第八卷 族祿處分錄 秩祿處分參考書 秩祿處分額末略 昭和八年刊
- 第九卷 藩債處分錄 舊藩外國通債處分錄 藩債輯錄 昭和八年刊
- 第十卷 九分利付外國公債記事 在歐吉田少輔往復書類 七分利付外國公債發行日記 昭和八年刊
- 第十一卷 準備金始末 明治三十年幣制改革始末概要 準備金始末參考書 明治年間米價調節沿革史 紙幣整理始末 昭和八年刊

一六六 (七五二)

- 第十二卷 貨幣制度調查會報告及同附錄 昭和八年刊
- 第十三卷 明治貨政考要 昭和八年刊
- 第十四卷 貨政考要法令編 昭和八年刊
- 第十五卷 第十六卷 會社全書 上、中、昭和八年刊
- 第十七卷 工部省沿革報告 會計検査院史 昭和八年刊
- 第十八・十九・二十卷 興業意見書 上、中、下 昭和八年刊
- 第二十一卷 會社全書 下

以上の如きは、明治初期に關する文獻複刻の一例であるが、何れも、その特殊方面についての貴重な材料たるを失はない。殊に、明治初期文獻の蒐集に可成の困難があり、長い年月と忍耐力とを必要とするとき、如何なる種類の複刻にも敬意を表すべきであるが、複刻に當つては、困難な事であるが、充分な解説と嚴密な校訂とが願はしいものである。各個の思想家・學者の全集複刻に關しては、その條下に述べることにする。

三 主要思想家の著述

明治思想の主要潮流は、文明主義である。廣く知識を世界に求めて、封建日本を近代日本たらしめるところに、明治初期の國民的意氣があつた。明治の思想史は、幕末に行はれた攘夷・開國論争から始めらるべきであるが、この論争は一應開國論の勝利に終つてゐるので、近代日

本の黎明である明治初年について見れば、文明主義は昇天の勢をもつて、その勢力を増してゐるのである。この文明主義を宣布した學者思想家の主なるものは、横井小南・福澤諭吉・加藤弘之・神田孝平の諸先覺を數ふべきであり、これらの先驅者に續いて、明六社を組織した當時の學者思想家を擧ぐべきであらう。これらの思想家學者の任務は、近代日本の思想的基礎を作ることであつた。その基礎は、何れにもせよ、西洋學術・思想の輸入によつて形成せらるゝのであつた。これらの先覺者中横井小楠は最も先輩であり、明治政府の長老參議として尊敬せられたが、明治二年京都において守舊論者のために暗殺された。横井小楠の著述は多くはない。

二二 小楠遺稿 明治二十二年十一月刊 明治三十一年五月再版 編輯者横井時雄

この遺稿編纂は、雜著・建白類・書翰類をその主なるものとする。彼の文章は、多く短篇である。その内社會經濟思想として讀むべきものは、

二三 夷慮應接大意 嘉永七年

二四 國是三論 富國論・強兵論・士道 萬延元年 この内富國論において、彼の社會經濟的經綸を見ることが出来る。

明治初年の思想家中最も大衆的影響を持つたものは、

明治初期社會經濟思想文獻大要

福澤先生であることは、いふまでもない。先生の譯著書は正續全集に收められてゐる。

二五 福澤全集 一〇卷

二六 續福澤全集 七卷

福澤先生の著作は單行本としては、今日にいたるまで時事新報社から刊行されてゐる。また岩波文庫の内には、

二七 福澤選集 小泉信三編

二八 文明論之概略

があり、近世社會經濟學說大系中には、

二九 神田孝平・福澤諭吉集

として、筆者が編輯し、解題を附けてゐる。これらの巨大な著述中、社會思想・經濟思想史上に記憶せらるべきものは、次の如きものであらう。

- 三〇 唐人往來 文久年間執筆
- 三一 西洋事情 慶應二年—明治二年刊
- 三二 學問のすゝめ 明治五年—明治九年刊
- 三三 文明論之概略 明治八年刊
- 三四 舊藩情 明治十年刊
- 三五 民情一新 明治十二年刊
- 三六 民間經濟錄 明治十年刊
- 三七 通貨論 明治十一年刊
- 三八 貧富論 明治十七年刊
- 三九 實業論 明治二十六年刊

一六七 (七五三)

神田孝平は著述するところ甚だ多くないものの一人であらう。しかし、彼の論議は著しく實際的であり、また簡明なものであつた。彼の著作・翻譯は、「神田孝平略傳」によれば、種々の方面に涉つてゐるが、政治的の制度に關するものが多い。彼は西洋經濟原書の最初の輸入者である。

四〇 英國義里士氏著 神田孝平重譯
經濟小學 上下二冊 慶應三年刊 * (明・文・經濟)

この書の明治元年版は「西洋經濟小學」と題されたが、その後また「經濟小學」の舊名に復してゐる。この譯書は、福澤先生の「西洋事情」外篇におけるチャムブル經濟書の抄譯とともに、西洋經濟書の權輿といふべきである。彼の諸論策は、

四一 神田孝平原著 土居光華批評

評點・經世餘論 明治十二年十月刊

に收められてゐるが、その最も重要なものは、

四二 農商辨 文久元年

四三 田租改革議 明治三年

であるが、後者には筆者所藏の次の如き版本がある。

四四 神田孝平述 田稅新法壬申(明治五年)刊 * (明・文・經濟)

また神田孝平は、探偵小説の輸入者である。それは「和

蘭美政錄(明治文化全集 翻譯文學篇)である。彼の論策は、彼の死後、「略傳」とともに刊行された。

四五 淡崖遺稿 明治四十三年刊

四六 神田孝平著

增補 農商建國辨 (明・文・經濟)

四七 神田孝平譯

泰西商會法則 已巳夏新刻 (同)

四八 神田孝平述

東西地主考 明治二十一年 (同)

加藤弘之は最も學校教師風の思想家である。殊に明治初年の通俗簡易な文章を捨て、且つ民權論の立場を棄てた以後(明治十五年)の彼は、全く官學の巨頭としての彼であつた。しかし、それ以前の彼は、達意の文章をもつて、人心を指導したのである。

四九 鄰章 文久三年

初めて日本において立憲政體を主張したる書にして彼の處女作、後に、加藤弘之講演全集・明治十二傑太陽増刊・明治文化全集 政治篇 所載

この書とともに、立憲制に關するものは、左の著作である。

五〇 立憲政體略 全 慶應四年刊 * (明・文・政治)

五一 眞政大意 卷上二冊 明治三年刊 * (明・文・民權)

五二 國體新論 明治七年刊 * (明・文・民權)

ビーデルマン著

五三 各國立憲政體起立史 六冊 明治八年刊

ビーデルマンの著述は、加藤が民選議院設立建白書を反駁する場合に引用したところであつて、前の三著とは、その立場を異にする。眞政大意・國體新論は急進的民主主義で、所論激烈で後に彼自身發賣頒布の禁止を願ひ出てる。「眞政大意」は彼の經濟論をも示すものであるが、外國貿易論としては、

五四 加藤弘藏著

交易問答 上下 四冊 明治二年刊

が有名であり、後に英國領事の報告書に英譯せられてゐる。勿論進歩的開國論である。彼のプロイセンの立場を形成したものは、彼の翻譯

五五 イ・カ・ブルンチュリ著

國法汎論 明治十一年刊

がある。彼が民主主義的立場を止揚し、國家主義への哲學を構成したものは、天賦人權論に對する批判である。

五六 人權新說 全 明治十五年刊 十六年三版

彼はこの書の中で、社會的進化論(社會ダウイン主義)によつて、天賦人權論を批判したが、これに對しては、多くの駁論が公にされたが、それは集録されてゐる。

明治初期社會經濟思想文獻大要

五七 明治文化全集編輯部編 人權新說駁論集 (明・文・民權)

この以後加藤の立場は、優勝劣敗・弱肉強食の社會哲學に基礎を置くものとなつた。その主なる著述は次の如くである。

五八 強者の權利の競争 明治二十六年刊

五九 道徳法律之進歩 明治二十七年刊

六〇 增補道徳法律進化之理 明治三十三年刊、三十六年三版

六一 改訂道徳法律進化之理 明治二十七年刊

六二 小學教育改良論 明治二十七年刊

六三 二百年後の吾人 明治三十二年刊、三十四年五版

六四 天則 合本 第一編 明治二十三年刊

加藤は大正四年頃まで著述を續けてゐたが、その活動は、日清戦争までを最高のものとすべきであらう。この時期の彼の論策は、次の全集に集録されてゐる。

六五 ドクトル 加藤照麻呂 編纂

加藤弘之講演全集 完 明治三十三年刊

この時期以後には、次の諸著がある。

六六 進化學より觀察したる日露の運命 明治三十七年刊

六七 自然界の矛盾と進化 明治三十九年、明治四十一年六版

六八 吾國體と基督教 明治四十一年刊

六九 「吾國體と基督教」の批評の批評 明治四十一年刊

迷想的宇宙觀

一六九 (七五五)

明治初期社會經濟思想文獻大要

- 七〇 基督教の書物 明治四十四年刊
- 七一 自然と倫理 明治四十五年刊
- 七二 學說と巧袋 明治四十四年刊
- 七三 國家の統治權 「自然と倫理」の補遺 第一 大正二年刊
- 七四 人性の自然と吾邦の前途 第一 大正四年刊
- 七五 責任論「自然と倫理」の補遺 第二 大正四年刊
- 七六 加藤弘之自叙傳 大正四年刊

この四人の先覺者の外、思想家・學者は多數あつた。當時、洋學研究者を會同せしめ、西洋諸學の紹介と、社會現象を説明批判する雜誌も出た。「明六社」並に「明六社雜誌」がこれである。「明六社」は當時最も高級の西洋學術紹介の雜誌であつた。この雜誌は當時の思想傾向を知る最も貴重なるものである。「明・文・雜誌」明治六年に創立されたので「明六社」と名づけられた。文明開化の聲が甚だ盛であつた當時、最も有力な思想的結社といふことが出来る。いまその同人と年齢を擧げて置く。

- 阪谷 素 五十二歳 杉 享二 四十六歳
- 箕作 秋坪 四十九歳 加藤 弘之 三十八歳
- 西 周 四十八歳 神田 孝平 四十四歳
- 柏原 孝章 四十七歳 森 有禮 三十二歳
- 西村 茂樹 四十六歳 田中 不二磨 二十九歳
- 津田 眞道 四十五歳 清水 卯三郎 四十三歳

- 八九 西村茂樹著 日本道徳論 明治二十年刊(岩波文庫)
- 九〇 西村茂樹著 讀書次第 明治二十六年刊
- 九一 箕作麟祥譯 ボンヌ 泰西勸善訓蒙 (上中下・後篇四・全七冊) 明治四・六年版(明・文・思想)
- 九二 箕作麟祥譯述 カスバル・ホフキンス著 萬國政體論 一三三 三冊 明治八年刊
- 九三 津田眞道 津田眞一郎譯 シモン・ヒッセルング口述 泰西國法論 一四四 四冊 慶應戊辰刊
- 九四 津田眞道譯 シモン・ヒッセルング著 表紀提綱 一名 政表學論 明治七年刊(明・文・經濟)
- 九五 津田眞道著 如是我觀 明治八年刊
- 九六 杉亨二譯 キイヒツツ氏著 交易通史 一・二・三上・三下、四冊 一、明治五年刊 二、三下、明治九年刊
- 九七 杉亨二筆記 國政黨派論 全 明治十年刊
- 九八 世良太一編纂 杉先生講演集 全 明治三十五年刊

四 外國書翻譯 (明治十年以前)

明六社を中心とする學者・思想家の活動を中心として、この外にも尚ほ多くの學者論客が活動してゐる。その多くは、洋學者であつたことは、當時における洋學の隆盛に徴しても明かである。當時の洋學塾における塾生數を

明治初期社會經濟思想文獻大要

一七〇 (七五六)

- 中村 正直 四十二歳 津田 仙 三十七歳
- 福澤 諭吉 四十歳 箕作 麟祥 三十歳
- 西周は哲學者である。彼は西洋哲學の最初の輸入者である。その著述には次の如きものがある。
- 七七 畢西林氏說 西周助譯述 官版 萬國公法 一四四 四冊 慶應四年刊
- 七八 西周撰 性法略 單 明治四年刊
- 七九 百一新論 (明治名著集・明・文・思想篇) 明治七年刊
- 八〇 ミル 利學 明治十年刊
- 八一 西周哲學著作集 麻生義輝編 昭和八年刊
- 中村正直は西洋道徳の鼓吹者である。その譯述書は有名である。
- 八二 ミル 自由之理 明治四年刊(明・文・自由民權)
- 八三 英國斯邁爾斯著 中村敬太郎譯 西國立志編 原名自助論 第二冊 第十一冊 明治四年刊
- 八四 ランソム・ギルレット 共和政治 明治六年刊
- 八五 英國斯邁爾斯著 中村敬太郎譯(スマイルス) 中村正直譯 西洋行品論 十二冊 明治十一年・十三年刊
- 八六 敬宇先生上書是非 (明・文・思想) 明治十一年・十三年刊
- 八七 西村茂樹譯 經濟要旨 四冊 明治七年刊
- 八八 西村茂樹編纂 校正 萬國史略 卷之一 卷之十上・卷之十下 十一冊 明治十二年刊

「新聞雜誌」第五號(明治五年三月)によつて擧げれば次の如くである。

- 英佛學 箕作 秋坪 一〇六名
 - 洋漢學 山東 一郎 三四名
 - 佛學 福地源一郎 七八名
 - 洋漢學 尺 振八 一一一名
 - 英佛學 田中 錄之助 二三名
 - 英佛學 司馬 少博士 一九名
 - 佛學 伊藤 昌之助 一四名
 - 洋學 中 神 保 一三名
 - 洋學 西 周 助 一三名
 - 英學 上野 鐵太郎 九名
 - 英學 山尾 工部權太丞 八名
 - 佛學 高橋 琢也 四名
 - 佛學 村上 英俊 一三名
 - 英學 吉田 健三 六名
 - 英學 福澤 諭吉 三三名
 - 英學 鳴門 二郎吉 一四名
 - 英學 福澤 諭吉 一四名
- かくの如き状態は、當時の必要と相俟つて西洋學術・思想の翻譯の流行を見せしめるに至つた。而して、西洋學術書の翻譯においては、主として自由主義的傾向を有するものが、その主流を占めてゐたことを否定することは出来ぬ。これは、西洋文物の輸入當時にあつて、その主勢力國たるイギリスの影響が最も主要なものであつたからである。いまその主要なるものの中、明治十年以前におけるものを擧げれば、次の如くである。

經濟關係書

- 九 福澤子園閑 岡本約博卿譯
萬國政表 萬延元年刊 (明・文・經濟)
一〇 小幡篤次郎譯述
生産道案内 明治三年刊
一〇一 澁澤榮一著
官版立會略則 明治四年刊 (明・文・經濟)
一〇二 福地源一郎譯
官版 會社辨 明治四年刊 (明・文・經濟)
一〇三 ウエランド著 瓊江何先生譯
世渡の杖 一、二、三冊 一名經濟便蒙 明治五年刊
一〇四 小幡篤次郎譯
英蘭志須英蘭土(フランス・ウィーランド)著
英氏經濟論 初編一 明治六年刊
一〇五 室田充美譯
經濟新說 卷之一、卷之二 二冊 明治六年刊
一〇六 西村茂樹譯
經濟要旨 上下 三冊 二部 計四冊 明治七年刊
一〇七 高橋達郎譯編
百科全書 交際篇 上下 二冊 明治七年刊
一〇八 堀越愛國譯
百科全書 經濟論 明治七年刊
一〇九 米國ウオールズ氏著 日本永峯秀樹譯
富國論 一、二、三 三冊 明治七年刊
一一〇 島邨泰撰
立會就産考 明治八年刊

- 一一一 大島貞益譯
馬爾丟斯(マルサス) 人口論要略 全 明治九年刊
一一二 史官本局譯述
彼理氏著 理財原論 卷一、卷二、一冊 卷三、二冊 明治九年刊
一一三 史官本局譯述
彼理氏著 理財原論 卷四、卷五、卷六、一冊 明治十年刊
一一四 史官本局譯述
彼理氏著 理財原論 卷七、卷八、卷九、卷十、全四冊 明治十一年刊
一一五 大野直輔著
經濟新話 上下二冊 明治十年刊
一一六 米國ハスケル氏原著 日本永峯秀樹抄譯
經濟小學 家政要眞傍訓 卷之上下 二冊 明治十年刊
一一七 牧山耕平譯
初學經濟論 改正三版 卷一、三 三冊 明治十年刊、十五年三版
一一八 永田健助譯 寶節德(ホーセツト)氏原撰
寶氏經濟學 一、二、五 五冊 明治十年刊
一一九 高橋達郎譯編 內村耿之助校
交際編 明治十年續刻
一二〇 永田健助譯補
寶氏經濟學 改譯增補 明治十年刊 廿年改譯增補版
一二一 古澤滋 埃國バロン、アレキサンダ 對譯(ヨフリ)・ル・フオン、シーホルド、土山盛有 對校(ヨフリ)氏述
經濟要説 一、三 三冊 明治十年、二、明治十一年

經濟學の知識が福澤先生の「西洋事情」外篇、神田孝平譯の「經濟小學」によつて輸入せられたことは、既に書いたが、この期間には、同じく福澤先生によつて輸入せられ、慶應義塾において、講述せられたウエーランドの經濟書の紹介が主流をなしてゐるやうに思はれる。フオーセツトなどの翻譯も見られる。後の國民主義者大島貞益が「社會主義」の著述をよみ、その中からマルサス人口論の要旨を譯したことは特筆に値する。この譯書は稀觀書に屬する。

政治關係書

- 一二二 鈴木唯一譯 アルバニイ・ホンプランク著
英政如何 一、五 五冊 慶應氏展刊(明・文・政治)
一二三 ヨング著 瓊江何禮之譯述
政治略原 一、二、三冊 明治辛未(四年)刊
一二四 箕作麟祥閑 大井憲太郎譯
佛國政典 卷一、二 二冊 明治六年刊
一二五 高橋達郎纂輯
自主新論 初篇上下 二篇上下 四冊 明治六年刊
一二六 米人准爾德(ウーランド)著 平野久太郎譯
修身學 卷之一、四 四冊 明治八年刊
一二七 孟德斯鳩(モンテスキュー)著 何禮之重譯
萬法精理 上下 二冊 明治八年刊

明治初期社會經濟思想文獻大要

- 一二八 尾崎三良譯
英國成文憲法纂要 乾坤二冊 明治八年刊
一二九 設爾敦阿謨私口授 安川繁成編錄
英國政治概論 前編上中下 六冊 明治八年刊
一三〇 ミル著 永峰秀樹譯
代議政體 明治八、十一年刊
一三一 トマス・ペイン著 深間内基譯述 于河岸貫一校正
道理之世 一、四 四冊 明治九年刊
一三二 小林儀秀纂譯 清水世信校
政體論 明治九年刊
一三三 ミグエー氏著 河津祐之譯
佛國革命史 第一冊、第四冊 四冊
一三四 ギゾー氏著 永峰秀樹譯
歐羅巴文明史 一、一〇 一〇冊 明治九年刊
一三五 加藤正之再譯 シライドリード譯述
日耳曼大宰相 比斯馬克政略起原 全 明治十年刊
一三六 蘆巖(ルッソウ)譯 服部德譯
民約論 明治十年刊
一三七 佛國或雅屈斐(ジャン・ジャック・ルッソウ)原著
日本原田潛譯述覆義 明治十六年刊
民約論覆義 全 明治十六年刊

鈴木唯一によつて「英政府如何」が翻譯されて、英國の政治事情が紹介せられ、その後福澤先生の「英國議事院談」(明治二年刊)・加藤弘之の立憲政體に關する諸著が

出て、維新に於ける公議政治の宣言とともに、立憲政體に對する要望を深めたことは事實である。フランス政治については、フランス政典があり、モンテスキューの「法の精神」ルッソウの「社會契約論」の如き本格的民主主義の古典が譯出されたことは、政治方面の知識の進歩を語るものである。

五 文明開化論

以上の西洋學術・思想の輸入紹介は、明治政府の文明政策に應呼したものであるが、この西洋學術・思想の紹介を一層通俗化して、大衆教育の役割を勤めたものは、文明開化論である。

- 一三八 交易心得草 前編、後編上下 三冊
前編明治元年、後編明治三年刊
- 一三九 大史元田直著 東京土産 全
明治四年刊
- 神原伊裕著
一四〇 寄合ばなし
明治七年刊(明・文・開化)
- 小川爲治著
一四一 開化問答
明治七年刊(明・文・開化)
- 横川秋濤著
一四二 開化の入口
明治六、七年刊(明・文・開化)

- 一四三 加藤祐一講述 文明開化 初編上、下 二編上、下 四冊
二部八冊 明治七年刊(明・文・開化)
- 一四四 加藤祐一先生著 開化進歩乃目的 上下 二冊 明治六年刊
- 一四五 服部誠著述 東京新繁昌記 初編一五編 後編一 六冊
初一五編 明治七年 後編一 明治十四年刊
- 一四六 小川爲治著述 開化問答 上下 二冊 二部四冊 明治七年刊
- 一四七 岡部啓五郎編 文明開化評林
一四八 増山守正編 舊習一新
一四九 石川富太郎編 明治の光 一名 高橋政史夜話
明治八年刊(明・文・開化)
- 一五〇 佐田白茅著 極論開化 全
明治八年刊
- 一五一 永峰秀樹譯 チェストル・フィールド原著 智氏家訓 上中下 三冊 明治八年刊
- 一五二 平山果 宮内貫一 編輯 日本開化詩 初編 明治九年刊
- 一五三 吉岡徳治著 開化本論
明治十二年刊(明・文・開化)
- 一五四 松田敏足著 文明田舎問答
明治十一年刊(明・文・開化)

一五五 山口又一郎著 開化自慢

一五六 辻弘想著 開化のはなし

一五七 川松慈榜君編著 下學興感 立志之友 全

- 明治十七年刊(明・文・開化)
- 明治十二年刊(明・文・開化)
- 明治二十年刊

六 保守反動の思想 佐田介石

自由主義的傾向に對しては、舊武士層・農民層からの反對があつた。殊に經濟思想的には、明治七・八年における慶應義塾一派の國民主義的轉向があつたが、この傾向を更に押し進め、封建的自給自足の經濟論をなしたものは佐田介石である。彼は、西洋物理學の地動説に對しても反對した。その方面の文獻もここに掲げて置く。

- 一五八 佐田介石編輯 世益新聞 第四號附錄 明治七年刊
- 一五九 佐田介石編輯 世益新聞 第五號一第九號
- 一六〇 佐田介石著 視察等象儀記初編 明治十年刊
- 一六一 佐田介石著 栽培經濟論 前篇 上下二冊
明治十一年刊(明・文・思想)
- 一六二 佐田介石撰 栽培經濟論 後篇 上 明治十二年刊(明・文・思想)

明治初期社會經濟思想文獻大要

- 一六三 佐田介石撰 栽培經濟論 後篇 下 明治十二年刊(明・文・思想)
- 一六四 佐田介石著 佛教創世記 全 明治十二年刊
- 一六五 佐田介石著 視察等象儀詳説 完 明治十三年刊
- 一六六 佐田介石著 天地論往復集 初篇二篇、完 二冊
初篇明治十四年刊 二篇明治二十一年
- 一六七 佐田介石編輯 栽培經濟問答新誌 自第一號至第四〇號
四冊一組 明治十五年刊 第一號明治十四年刊
- 一六八 佐田介石編輯 栽培經濟問答新誌 第一一號一〇號 全一冊
第一號明治十四年 二一〇號明治十五年刊
- 一六九 佐田介石編輯 栽培經濟問答新誌 一一號一二〇號
三一號一四〇號 三冊 明治十五年刊
- 一七〇 佐田介石著 全國商法の栽培 全 明治十六年刊
- 一七一 佐田介石著 點取交通論 全 明治十六年刊
- 一七二 佐田介石著 天地論往復集 二編 完 明治廿一年刊
- 一七三 佐田介石著 鏈地球說略 卷之一並卷之二 二冊
- 一七四 佐田介石著 零園論 完

七 自由民權

民權運動は、明治七年の民選議院設立建白運動にまで遡らねばならぬ。民権思想は、明治初年から輸入されてゐるが、その結實は自由民権運動である。いふまでもなく自由民権運動は、明治初期における言論運動の最高峰である。故に自由民権に關する文獻は豊富である。

中江篤介（兆民）

- 一七五 中江篤介譯 維氏美學 上册下册 二册 明治十七年刊
- 一七六 中江篤介著 革命前法朗西二世紀事 全 明治十九年刊
- 一七七 中江篤介著 理學鉤玄 全 明治十九年刊
- 一七八 中江篤介著 三醉人經綸問答 全 明治二十年刊
- 一七九 中江篤介先生著 平民の目まじし 明治二十年刊二十一年四版
- 獨乙シヨフハソハウル氏原譯 日本中江篤介重譯
- 佛蘭西アル・ビニールト氏譯 明治二十七年刊
- 一八〇 道徳學大原論 上卷下卷 二册 明治三十四年刊
- 一八一 中江篤介著 一年有半 明治三十四年刊
- 一八二 中江篤介著 續一年有半 明治三十四年刊(岩波文庫)
- 一八三 中江篤介先生著 四民之目醒 明治三十五年刊
- 一八四 中江篤介遺稿 警世放言 明治三十五年刊
- 一八五 中江篤介著 兆民文集 明治四十二年刊
- 一八六 中江篤介著 兆民文集 昭和四年刊
- 一八七 兆民選集 嘉治隆一編輯(岩波文庫) 昭和十一年刊

自由民権論 譯著書

- 一八八 トクグイル著 上木自由論 明治六年刊(明・文・民權)
- 一八九 小幡篤次郎譯 自主之權 上下二册 明治六年刊
- 一九〇 廣津弘信著 民權大意 卷上卷下 二册 明治七年刊
- 一九一 竹中邦香著 自由論 全 明治七年刊
- 一九二 高田義市著 民權論集 上下二册 明治七年刊
- 一九三 櫻井忠徳編輯 大井憲太郎 實田眞藏譯 明治七年刊
- 佛國民選議院選舉法 明治七年刊
- 山田俊藏編輯 民選議院論 全 明治八年刊
- 中島勝義編輯 明治九年刊(明・文・民權)
- 俗學驚談 完 明治十年刊(明・文・民權)
- 兒島彰二編輯 民權問答 明治十一年刊
- 福澤諭吉著 通俗國權論 明治十一年刊
- 植木枝盛著 民權自由論 明治十一年刊(明・文・民權)
- 福本巴著 普通民權論 明治十二年刊(明・文・民權)
- 外山正一著 民權辯惑 明治十三年刊(明・文・民權)
- 三宅虎太郎編纂並譯 愛國論編 明治十三年刊
- 三宅虎太郎編纂 明治十四年刊
- 集評明治振起編 明治十四年刊
- 附自由黨告誦頭末政黨團結狀况
- 植木枝盛編輯 愛國志林 第一編 第一〇篇 明治十三年三月十三日第一編刊同五月八日第二編刊同月二十六日第三編刊六月七日第四編刊同十八日第五編刊同二十六日第六編刊七月六日第七編刊同十三日第八編刊同二十四日第九編刊八月八日第十編刊
- 加藤政之助著 日本政略 全 明治十四年五月刊
- 勝海舟題 政治論綱 全 明治十四年刊
- 林包明著 明治十四年刊

自由民権反對論

- 二〇六 林包明著 政治論綱 全 明治十四年刊
- 二〇七 傍木哲次郎編輯 主權論 全 明治十五年刊
- 二〇八 長東宗太郎編 民權家必讀 主權論纂 明治十五年刊
- 二〇九 林包明著 社會哲學 全 明治十五年刊
- 二一〇 植木枝盛著 天賦人權論 明治十六年刊(明・文・民權)
- 二一一 馬場辰猪著 天賦人權論 明治十六年刊(明・文・民權)
- 二一二 宮崎富要閣 和田稻積著 明治十六年刊
- 二二三 通俗社會論 全 一名人間世界の組織 明治十六年刊
- 板垣退助立案 植木枝盛記述 和田稻積編輯 明治十六年刊
- 二二四 通俗無上政法論 全 明治十六年刊
- 小室信介編輯
- 東洋民権百家傳 初帙上、中、下、下九册
- 一名日本義人傳 第三帙上、中、下、下三册
- 二二五 東洋小野梓著 國憲汎論 上中下三册 明治十七年刊
- 齊藤和助編輯 板垣退助君高談集 明治十八年刊

民権運動に關する著書

- 二二二 文部省編輯局 英國學士拂波士主權論 明治十六年刊
- 二三三 三島通庸著 國のすがた 明治二十年刊
- 井上勤著 民權國家破綻論 明治十三年刊
- 織田純一郎著 通俗時弊論 初編 明治十三年刊
- 川島正三編輯 通俗明治民權之花 明治十四年刊
- 山岸文藏編輯 明治十四年刊
- 明治民權家詩文 上卷下卷 二册 明治十四年刊
- 藤田四郎著 歐米政黨沿革史總論 明治十五年刊
- 中村義三編輯 內外政黨事情 明治十五年刊
- 長谷川泰集輯 國權奮起政論軌範 明治十五年刊
- 谷壯太郎編輯 愛國民權演說家百詠選 明治十五年刊
- 藤井麗輔編輯 自由黨雪冤錄 明治十五年刊
- 久我懋正編輯 現今民權家品行論 明治十五年刊
- 織田純一郎著 政治難易論 完 明治十六年刊
- 田口卯吉立案 時勢論 全 明治十六年刊
- 大井通明筆記
- 今井藤次郎編輯 前代未聞政黨藤栗毛 明治十六年刊
- 新井旭著 一名改進黨員一大閉口錄 明治十六年刊
- 大養毅著 日本人民之急務 全 明治十七年刊
- 孤松二宮熊次郎著 政治之燈臺 明治二十年刊
- 少壯政事家之狂奔 第三版 明治二十年刊二十一年三版
- 舊自由黨員小勝俊吉君校閱 石川傳吉編輯

明治初期社會經濟思想文獻大要

- 二四〇 大坂國事犯公判傍聽筆記 明治二十年刊
清水亮三編 壯士運動 社會の華 明治二十年刊
二四一 鐵腸末廣重著 明治二十年刊 同年再版
二四二 再版 現今の政事社會 明治二十一年刊
末廣重著 軋轢の原因 全 明治二十一年刊
二四三 政論社
政論 第一號一七號、一〇號 八冊 明治二十一年刊
二四四 野島幾太郎編輯
自由平等 經緯 第一號一六號二冊 明治二十四年刊

八 演説・文集

民權運動は、その本來の形態においては、言論運動であり、演説運動であつた。従つて、民權運動の勃興とともに、演説は全國的に流行した。演説集・演説法に關するものは雨後の筍のやうに續出したのである。以下は筆者の書棚にあるもののみを挙げる。

- 二四五 高橋易直編輯 明治文抄 一三三冊 明治十年刊
二四六 高橋易直編輯 續明治文抄 一四四冊 明治十年刊
二四七 土居光華抄譯并編輯
偶評 歐米大家所見集 一三三冊 明治十一年刊
沼間守一校閱 ウヰルレム・オキスホルド著 久松義典譯述 明治十二年刊
二四八 泰西雄辯大家集 日本沼間守一校閱 久松義典譯述 明治十二年刊
二四九 美國維廉・阿斯福編纂 日本沼間守一校閱 久松義典譯述 明治十二年刊
泰西雄辯大家集 續編 二冊 明治十二年刊

一七八 (七六四)

- 二五〇 愛國居士著 民權振起 演説一班 全 明治十二年刊
二五一 岡文二編輯 明治演説大家集 一三三冊 明治十三年刊
二五二 岡文二編輯 明治六大家文抄 一三三冊 明治十三年刊
二五三 英國ロバートン原著 沼間守一校閱 明治十四年刊
日本西村玄道譯述 未廣重著 校閱 明治十四年刊
二五四 西洋討論軌範 栗田信太郎編輯 明治十四年刊
西村玄道校閱 栗田信太郎編輯 明治十四年刊
二五五 政治學術 日本討論軌範 全 明治十四年刊
三宅虎太郎編輯 明治十四年刊
二五六 增補訂正 民權自由 日本演説軌範 明治十四年刊
平井市造編 明治十五年刊
二五七 自由主義各黨政談 演説神髓 明治十五年刊
平澤寛柔編輯 明治十五年刊
二五八 於東京木挽町明治會堂 立憲改進黨諸名士 政談演説筆記 明治十五年刊
角田眞平序言 三宅虎太郎編纂 明治十五年刊
二五九 民權自由 日本演説軌範 明治十五年刊
英國アレキサンデル・ベル原著 日本富岡政矩譯著 明治十五年刊
二六〇 辯士必讀 演説學 安井乙熊編輯 明治十五年刊
有名諸家 演説集誌 第一號第三號一八號 明治十五年刊
一號三號明治十四年 四一八號明治十五年刊
二六一 木瀧清類編纂 並に板垣君刺客變報詳記 明治十五年刊
板垣君演説集

二六二 井田實之編輯

- 民權自由 西洋演説軌範 明治十五年刊
二六三 長谷川徳三郎編 政論彙纂 全 明治十五年刊
二六四 東京各社諸先生口述 杉山藤治郎著述 明治十六年刊
政治學術 演説討論種本 全 明治十八年刊
二六五 馬場辰猪著 再版 雄辯法 全 二十年再版
二六六 内山正如編輯 第一編一第七編 七冊 明治二十年刊
日本大家論集 第一編一第一〇編 六冊 明治二十一年刊
二六七 内山正如編輯 第八編一第一〇編 六冊 明治二十一年刊
日本大家論集 第二〇編、二二、二五編 三冊 明治二十二年刊
二六八 内山正如編輯 第二卷第三、四、六號 三冊 明治二十三年刊
日本大家論集 第三卷第一一六號 六冊 明治二十四年刊
二七〇 内山正如編輯 日本大家論集 第三卷第一一六號 六冊 明治二十四年刊
二七一 自由狂人中野了隨著 口から山任せ 滑稽政談 全 明治二十年刊
二七二 瘦々亭骨皮道人著 拍手喝采 滑稽獨演説 明治二十年刊
二七三 正四位山岡鐵舟君題字 日本藤田武城先生譯述 明治二十年刊
文明實地演説 明治二十年刊
明治初期社會經濟思想文獻大要

二七四 澤田誠武君編輯

- 雄辯秘術 演説美辭法 明治二十年刊 二十一年三版
二七五 岩井忠恕編輯 日本政治家意見集 明治二十年刊
二七六 獅蟲寛慈先生序 清海居士編輯 明治二十年刊
新日本政治社會之言論 日本與論 完 明治二十年刊
二七七 日本内山正如君編輯 日本與論 完 明治二十年刊
二七八 大橋高三郎編輯 社會輿論 未來政治家之覺悟 明治二十年刊
二七九 社會輿論 未來政治家之覺悟 明治二十年刊
清海居士編輯 新日本政治社會之言論 三版 明治二十一年刊
二八〇 鈴木五郎著 近世歐米政談之寫眞 明治二十一年刊
自由言論 歐米大家演説集 明治二十一年刊
二八一 福井淳君編輯 雄辯大家演説集 明治二十一年刊
二八二 總生竹天道人著 舊弊開化 口論會 明治二十一年刊 二十三年三版
二八三 瘦々亭骨皮道人著 素人同志稽古演説 明治二十一年刊
二八四 柳原政登編輯 現今大家演説論集 全 明治二十二年刊
二八五 學堂尾崎行雄君序 松井從夫著 通俗國會演説 文館叢書第九回 明治二十三年刊
二八六 田中正太郎編輯 國民演説 第三號 明治二十三年刊

九 國會論

自由民權運動は、民選議院建立運動の繼續であり、その目的は、人民の政治的權利を伸長するにあつた。而し

明治初期社會經濟思想文獻大要

三三八	英政治革命	米國ロベルト氏原著 日本永峯秀樹譯述	明治十二年刊
三三九	官民議場必携	米國李祿氏著 林董譯	明治十二年刊
三四〇	自治論 一名人民の自由	卷之上 卷之下 二冊 加太邦憲譯	明治十三年刊
三四一	佛國議會法詳説	アドリアン・ジュラン著	明治十三年刊
三四二	利用論 上下二冊	或斯亞的彌爾原著 澁谷啓藏譯	明治十三年刊
三四三	獨逸大學博士ブルンチュリ著	日本獨逸協會々員中根重一譯	明治十三年刊
三四四	政治學 第一一四卷 四冊	獨逸大學博士ブルンチュリ著	明治十五年刊
三四五	兵制學 第一一三卷 三冊	獨逸大學博士ブルンチュリ著	明治十五年刊
三四六	獨逸國學士佛郎都氏著 文部省編	獨逸國學士佛郎都氏著	明治十五年刊
三四七	佛氏國家生理學 第一編	英國議會政治論 至尊 一名 王室篇	明治十五年刊
三四八	英國議會政治論 至尊 一名 王室篇	英國議會政治論 至尊 一名 王室篇	明治十五年刊
三四九	政治眞論 一名主權辯妄	栗田信太郎譯纂	明治十五年刊

一八二 (七六八)

三五〇	西洋各國現今政治事情 全	佛國那計阿爾布禮著 日本宮健之譯	明治十五年刊
三五二	共和之原理 上卷下卷 二冊	英國バックスル原著 日本土居光華、漆間眞學合譯	明治十五年刊
三五三	自由之理詳論	英國マッケンジー著 川又萬譯	明治十五年刊
三五四	歐米十九世紀政治沿革史 第一卷	祖父江勝定纂譯	明治十五年刊
三五五	歐米政治叢談 一一三 三冊	尾崎行雄譯 トッド原著	明治十五年刊
三五六	英國議會政治論內閣更迭史	井上哲次郎抄譯 大槻文彦校訂	明治十五年刊
三五七	倍因氏心理新説 第一一四 四冊	英國日耳爾便撤誤著 日本陸奥宗光譯	明治十五年刊
三五八	利學正宗 上卷下卷 二冊	米國ウールセー著 日本堀口昇譯	明治十六年刊
三五九	政學 一名政治學 第一冊第二冊	米國アルバート・スチックス著 日本合川正道譯	明治十六年刊
三六〇	政體眞説政黨論	英國希爾普斯著 日本中田直哉譯	明治十六年刊
三六一	政治考察論 上冊	英國論理學大博士米尹氏原著 日本森田隆智譯	明治十六年刊
三六二	英國議會政治論 全	英國議會政治論 全	明治十六年刊

三六三	英國マッケンジー著 川又萬譯	明治十六年刊
三六四	歐米十九世紀政事沿革史 中卷 英國寶節德原著 日本澁谷健爾譯	明治十六年刊
三六五	政治談 上下 二冊 佛國納爾布禮著 奥宮健之翻譯	明治十六年刊
三六六	共和政體論 佛國ベルモレー原著 日本林庸介譯	明治十六年刊
三六七	社會論 第一卷 英國ヘンリー・サムエル・メイ著 法律博士鳩山和夫譯	明治十六年刊
三六八	續氏古代法 英國ダヒット・ヒューム氏著 日本土居言太郎譯	明治十七年刊
三六九	政治哲學論集 第一卷 ドクトル・ラートゲン講述	明治十七年刊
三七〇	行政學講義錄 上編 法朗西噠美爾亞哥刺士著 同氏門人西園寺公望序	明治十七年刊十九年再版
三七一	中江篤介校 酒井雄三郎、白石時康共譯 政理新論 前編之上、下 二冊 川尻寶孝著 村越實林、鈴木寶瀛筆記	明治十七年刊
三七二	內部文明論 全 英國アール・ダブリウ・チャルチ原著	明治十七年刊
三七三	日本宮川經輝、土居通豫同譯 歐洲正氣論	明治十八年刊
三七四	高田早苗講述 英國政典 全 リョースレル述 獨逸學協會翻譯	明治十八年刊
三七五	佛國革命論 全 尼歐羅、馬居空利著 杉本清胤譯述	明治十八年刊
	經國策 完	明治十九年刊
	明治初期社會經濟思想文獻大要	

三七八	英國マッケンジー著 上卷	日本井出徳太郎譯述	明治十九年刊
三七八	英國碩儒バツクル原著	日本文學士辰巳小次郎譯述	明治二十年刊
三七八	文明要論 完		
三七八	英國麻鴻禮郷著	日本吉田直太郎譯	
三七八	批評の鏡 彌兒頓論		明治二十年刊
三七八	高橋讓編輯		
三七八	歐米政典集誌 第一〇號—一八號	九册	
三七八	明治二十年一月八日第一〇號—一月二十三日第一一號		
三七八	二月三日第一一二號—二月十三日第一一三號	二月二十三日第一一四號—三月三日第一一五號	三月十三日第一一六號—三月二十八日第一一七號
三七八	四月三日第一一八號刊		
三七八	高橋讓編輯		
三七八	歐米政典集誌 第二〇號—二三號、二五號、五册		
三七八	明治二十年四月二十三日第二〇號—五月三日第二一二號		
三七八	五月十三日第二二號—五月二十三日第二二三號	六月十三日第二二五號刊	
三七八	英國スバンサー・ワルポール氏原著		
三七八	日本阪谷芳郎 山成哲造譯補		
三七八	ブラリス著 人見一太郎譯		
三七八	平民政治 上、下卷 二册		
三七八	國民卜國會ノ關係 全		
三七八	英國馬高禮原著	日本岩仲通譯述	
三七八	波良武氏憲法史評論		
三七八	テキ・ジョー・ローレンス著	鈴木光長編輯	
三七八	國際公法論 一卷		
三七八	明治二十五年刊		
三七八	明治二十二年刊		
三七八	明治二十四年刊		
三七八	明治二十六年刊		

これらの社會科學方面における外國書の翻譯中最も多

一、一 スペンサア翻譯

一八三 (七六九)

明治初期社會經濟思想文獻大要

きものは、ハアバート・スペンサーの著述の翻譯である。スペンサーの立場は、社會現象の科學的研究を目的とする社會學者のそれであるが、當時の日本における翻譯者は多く彼の國家不干渉主義に共鳴し、従つて、その理論から民權論に至らんとしたものである。たゞ彼の「社會學原理」の翻譯においては別である。「社會學原理」の翻譯には二種ある。乗竹孝太郎譯と大石正巳譯である。乗竹譯に對しては、スペンサー外山正一が有名な新體詩の序文を附し、社會學が社會現象の正確な把握のために必要なること、従つて、政治家新聞記者等がこれを學修すべき必要を説いたのは、學問の實踐的態度として注目し得る。スペンサーの翻譯は甚だ多數であるが、筆者所藏するところは、次の如きものである。

- 三八五 鈴木義宗譯 斯邊撒氏 代議政體論 全 明治十二年刊
三八六 鈴木義宗譯 斯邊撒氏 干涉論 全 明治十二年刊
三八七 斯邊撒氏著 松島剛譯 社會學原理 第二版 明治十四年刊二十年第二版
三八八 波・斯邊撒氏著 山口松五郎譯 訂正道德之原理 明治十六年刊十七年三版
三八九 英國スペンセル氏著 日本乗竹孝太郎譯 外山正一序 社會學之原理 上下二冊 明治十六年刊二十五年再版
三九〇 英國スペンサー氏著 日本大石正巳譯 社會學 卷之一 五 合本 明治十六年刊

一八四 (七七〇)

- 三九一 英國大儒波邊氏著 大日本宮城政明譯述 代議政體論覆義 明治十六年刊
三九二 河津祐之校閱 高橋達郎譯 漢勃彌爾爾爾爾爾 政府權限論 明治十七年刊
三九三 英國波・斯邊撒氏著 日本山口五郎譯述 社會學原理 完 明治十七年刊
三九四 ハーバート・スペンサー著 濱野定四郎 政治哲學 前編 渡邊治共譯 明治十七年刊
三九五 英國斯邊撒氏著 高橋達郎譯 宗教進化論 明治十九年刊
三九六 英國須邊氏原著 平松熊太郎譯述 代議政體得失論 明治二十一年刊
三九七 英國斯邊撒氏原著 尺振八先生譯 斯氏教育論 明治二十一年刊

一二 社會學書

スペンサーは、わが國における社會學の源泉である。勿論、文明論は社會學の温床であり、ギゾー、バククル、モンテスキュー等の著作は、その思索方法において、社會學的であり、福澤先生の「文明論之概略」の如きものは、社會學的著述であるが、いま社會學的著述を挙げれば、次の如きものがある。

三九八 有賀長雄 社會學 卷一 社會進化論 明治十六年刊
三九九 有賀長雄 社會學 卷二 宗教進化論 明治十六年刊

- 四〇〇 有賀長雄 社會學 卷三 族制進化論 明治十七年刊
四〇一 有賀長雄著 增補族制進化論 明治十七年刊二十三年增補再版
四〇二 有賀長雄著 增補社會進化論 明治十九年刊二十四年增補四版
四〇三 文學士 井上哲次郎著 倫理新説 明治十六年刊
四〇四 哲學教授ほうろん原著 哲學專修有賀長雄譯解 明治十七年刊
四〇五 文學博士 井上哲次郎 文學士 有賀長雄合著 改訂增補 哲學字彙 明治十七年刊
四〇六 佛國ア・ロビダ氏著 日本藤山廣忠譯 社會進化 世界未來記 全部合卷 明治二十年刊
四〇七 文學士 三宅雄二郎譯述 伊達周碩筆記 明治二十一年刊
四〇八 文學士 有賀長雄編述 國家學 明治二十二年刊
四〇九 穗積陳重著 法典論 全 明治二十三年刊
四一〇 穗積陳重著 法理學叢書 明治二十四年刊
四一一 衆議院書記官法學士 永井久滿次著 社會文庫第一編 個人對國家論 明治二十六年刊
四一二 有賀長雄編 日本古代法釋義 明治二十六年刊
四一三 澁江保著 通俗教育全書第八九編 社會學 全 明治二十六年刊
四一四 垣田純朗發行 平民叢書 第九卷 哲學變遷史 明治二十七年刊
四一五 撤遜ドクトル、エンゲル著 日本吳文聰譯 統計之神髓 一名社會狀態學 明治二十七年刊

- 四一六 英國哈麻頓頓頓頓 日本田中龍眉譯述 人類交際論 明治二十七年刊
四一七 英國チャールズ、ダーキン著 日本文學士 立花鏡三郎譯 生物起源 一名 種源論 明治二十九年刊
- 一三 經濟書翻譯
- 明治十年代以後においては、わが國の經濟の發展並に、それに基く國民諸層の利害關係の錯綜なるに従つて、種々の立場の經濟思想が紹介せらるゝに至つた。而して、國家財政の變革及び膨脹は、財政學の知識を必要とするに至り、その方面の翻譯紹介もその數を増加し來つたので、明治初年よりは、その質と量とにおいて、特殊の相を呈するに至つてゐる。
- 四一八 三輪信次郎譯述 銀行行情 第一冊—三冊 三冊 明治十一年刊 第二冊、明治十一年刊 第三冊明治十二年刊
四一九 永田健助編述 改正經濟說略 上下二冊 明治十二年刊
四二〇 米國經濟學士彼理氏著 日本川本清一譯 增補改正 理財原論 完 明治十三年刊
四二一 名井敬之進譯述 野村文夫校閱 モングレイン氏原著 自由貿易論 全 明治十四年刊
四二二 レバンスル著 永田健助譯 農工商經濟論 一一〇—一〇冊 明治十四年刊
四二三 佛國ボリュー氏著 日本駒井重格譯 明治十四年刊

明治初期社會經濟思想文獻大要

- 四二四 歲計豫算論 第一、三、三冊 明治十六年刊第一、二、三、明治十九年再版
鈴木秀太郎譯述 英國弗萊斯氏著
四二五 英國アダム・スミス氏著 日本石川暎作譯 明治十七年刊
富國論 上下二冊 明治十六年刊二十五再版
四二六 亞邊爾氏講義 宇川盛三郎口譯 藤根富彌筆記 明治十七年刊
理財學講義 英國ゼー・イー・ケアンズ氏著 田口卯吉譯 明治十七年刊
四二七 經濟學要義 英國寶節德著 日本片山平三郎譯 明治十七年刊
四二八 寶氏經濟夜話 明治十八年刊
四二九 佛國ビュフラン氏著 日本井上毅氏譯 明治十八年刊
四三〇 奢是吾敵論 上下二冊 明治十八年刊
英國レラン・レブキー氏著 日本金子金四郎譯述
四三一 貌列爾商業史 第一、第二、三冊 明治十九年刊
佛國ポール・レルロ・ボリュー氏著 明治十九年刊
租稅論 上卷下卷 明治十九年刊
四三二 米國ヘンリー・ジョー・ケリー氏著 日本大養毅譯
圭氏 經濟學 卷一、二、四冊 明治十九年刊
卷一、三、明治十九年刊 卷四、二十一年刊
四三三 ドクトル・ラートゲン・ドクトル・ミハエリス講義 行政學講義錄 工商政策論 全 自第一號至第一〇號 明治十九年刊
經濟博士 フレデリック・パスチア氏著 明治十九年刊
四三四 文學士 金子金四郎講義

- 四三五 經濟調和論 卷一 明治二十年刊
寶節德氏原著 矢野常太郎譯述
四三六 和稅論 全 明治二十年刊
佛國ボリュー氏著 田尻稻次郎講義
四三七 國債論 第一、第二、三冊 明治二十年刊
ジョー・ノルトン著 永田健助貫述
四三八 農理原論 一、二、六冊 明治二十年刊
リチャード・チー・ライ原著
和田垣謙三譯 嵯峨根不二郎譯
新舊兩派 經濟學要領 全 明治二十一年刊
四三九 ラヴレー著 米國文學士 珍田拾巳
日本農學士 下島孝吉合譯
四四〇 經濟範論 上卷 明治二十一年刊
ジュール・ダン著 田中健士譯述
法律經濟交涉論 上卷
四四一 弗勒得力李士德原著 明治二十一年刊
サム・フロン・エス・ロイド譯 大島貞益重譯
李氏經濟論 上、下卷 二冊
四四二 惹穩原著 杉山重成譯 明治二十二年刊
四四三 いりー原著 佐藤昌介譯述 明治二十二年刊
威氏經濟學 明治二十四年刊
四四四 ラル・ツット述 浮田和民譯 明治二十四年刊
經濟學之原理
四四五 ゼー・エス・ミル原著 天野爲之補譯

高等經濟論

- 四四六 和田垣謙三校訂 宮古啓三郎譯 明治二十四年刊
ボリュー氏 經濟學 卷之三、四、二冊 明治二十四年刊
四四七 キール氏原著 有賀長文譯註
再版 國民理財學 明治二十六年刊
四四八 大島貞益譯 日奔斯氏貨幣說 明治二十六年刊
ウオーカー氏原著 嵯峨根不二郎譯述
四四九 應用經濟學 社會文庫第十五編 全 明治二十七年刊
エミル・ド・ラブリイ原著 牧山耕平重譯
四五〇 エミル・ド・ラブリイ原著 明治二十七年刊
經濟學粹
四五一 ウヘル・ヘルム・ロツシェ 平田東助 明治二十七年刊
ル原著 品川彌二郎校閱 平塚完次郎 湯川 寛吉共譯
商工經濟論 上編下編 二冊
四五二 英國ギッピンズ氏著 日本水上梅彦譯 明治二十九年刊
英國産業史 上卷 明治二十九年刊
四五三 ターナー氏原著 濱野定四郎校閱 栗田宗次
山本淳吉譯述
四五四 歐氏經濟論 明治三十一年刊
天野爲之補譯 コーン財政學 明治三十二年刊
一四 經濟問題著述
四五五 田口卯吉著 自由交易 日本經濟論 完
四五六 岡田良一郎著 活法經濟論 乾坤 明治十二年刊
明治初期社會經濟思想文獻大要

四四七

- 大藏省銀行課編纂 銀行簿記例題 上下二冊 明治二十二年刊
四四八 松村操校閱 津田權平纂述 明治二十三年刊
明治立志編 一名民間榮名傳 初編、二編 二冊
四四九 米國文學士 田尻稻次郎講義 森本駿筆記 明治十八年刊
經濟學 第一冊、三冊 三冊
四六〇 駒井重格講義 專修學校生徒筆記
經濟學論 第一、第三 三冊
四六一 文學士 中川恒次郎著 明治十八年刊明治十九年再版
經濟實學講義 卷之一、二 二冊
四六二 高橋義雄著 卷之一、明治十九年 卷之二、明治二十年刊
拜金宗 一名商賣のス、メ 明治十九年刊二十年刊
四六三 拜金宗 一名商賣のス、メ 第二編 明治二十年刊
四六四 田口卯吉著 再版 經濟策 完 明治二十年刊
四六五 和田維四郎編述 獨逸農政要略 明治二十年刊
四六六 文學士 金子金四郎著
經濟學大意 完 明治二十年刊
松永道一著 實地應用商業指針 明治二十年刊
文學士 天野爲之先生講義 千早敏郎 糸永美筆記
經濟學講義 明治二十一年刊
四六九 荒川甲子三郎著 理財學 完 明治二十二年刊
四七〇 萩野由之著 日本財政史 完 明治二十三年刊
四七一 金谷可美男君著 教育基本經濟美談 明治二十四年刊二十五再版

明治初期社會經濟思想文獻大要

- 四七二 法學士 高槻純之助著 錢 一名通俗貨幣大意 寸珍百種 第三編 明治二十五年刊
- 四七三 寺島宗則君著 民富通言 完 明治二十五年刊
- 四七四 濱田健二郎 伊勢本一郎共著 經濟學史 全 明治二十七年刊
- 四七五 垣田純朗發行 世界經濟上之變動 平民叢書 第二卷 明治二十六年刊 二十八年五版
- 四七六 垣田純朗發行 經濟學道徳 平民叢書 第七卷 明治二十六年刊
- 四七七 垣田純朗發行 資本の活用 社會叢書 第五卷 明治二十九年刊
- 四七八 松本君平著 金貨本位論 明治三十年刊
- 明治二十年代は、わが國工業の發展期である。この期間に、わが國は、從來國內における生産の擴大を成遂げたところを、國外に發展せんとするに至つた。従つて、この期においては、對外發展の國策に關する多くの所論を見ることが出来る。また國內問題としては鐵道問題などが論議されてゐるやうである。
- 四七九 大越成徳著 外國貿易擴張論 明治二十二年刊
- 四八〇 依田民權子著 東方新世界 全 明治二十二年刊
- 四八一 藤田一郎先生著 日本經濟論 全 明治二十三年刊
- 四八二 尾崎行雄序文 高橋廉一著述 未來日本策 完 明治二十三年刊

一八八 (七七四)

- 四八三 清野勉隨筆 歸納論理 經世危言 完 明治二十三年刊
- 四八四 大石正巳著 富強策 全 明治二十四年刊
- 四八五 竹内正志著 新立國 全 明治二十五年刊
- 四八六 大石正巳著 日本之三大政策 明治二十五年刊
- 四八七 稻垣滿次郎演説 再版 對外策 全 明治二十四年刊 二十六年再版
- 四八八 稻垣滿次郎著 五版 東方策 第一編 明治二十四年刊 二十七年五版
- 四八九 再版 東方策 第二編 明治二十四年刊 二十五年再版
- 四九〇 稻垣滿次郎著 東方政策結論案 明治二十五年刊
- 四九一 稻垣滿次郎演説 商工業對外策 明治二十五年刊
- 四九二 機堂逸士阪元盛徳著 東洋經濟管見 明治二十七年刊
- 四九三 上田觀水著 海外貿易 商權擴張策 完 明治二十五年刊
- 四九四 下村房次郎著 鐵道論 第一編 明治二十四年刊
- 四九五 下村房次郎著 日本鐵道策 明治二十四年刊
- 四九六 尾崎三良君演説 鐵道國有論 明治二十四年刊
- 四九七 中根重一著 鐵道問題 明治二十五年刊
- 四九八 マスター・ラブ・アーツ 片山潜著 鐵道新論 全 明治二十九年刊
- 四九九 選信省 非鐵道國有意見抄 明治三十一年採率
- 五〇〇 鐵道國有意見抄 明治三十一年採率

一五 國家主義

西洋文明の輸入採用は、明治維新以來の方針であつた

が、明治十年代の終りにおいて、それは、形式的浮華的な傾向を帯びて來た。所謂歐化主義の鹿鳴館時代である。この歐化主義に對して、政教社を中心とする國粹主義者の反對があつた。その影響は、三十年代に至り、而して、今日に及んでゐる。

- 五〇一 ローレンツ・スタイン著 渡邊廉吉譯 行政學 上、中、下卷 三冊 明治十九年刊
- 五〇二 西村天四居士著 奴隸世界 全 明治二十一年刊
- 五〇三 河島醇編輯 憲法及行政法要義 明治二十二年刊
- 五〇四 日本人 第一、四輯 四冊 明治二十一年刊
- 五〇五 有賀長雄譯 須田因氏講義 完 明治二十一年刊
- 五〇六 中正社 渡邊鐵城編輯 保守新論 第一號一八號 十六冊 明治二十一年刊
- 五〇七 第一號一八號 十六冊 明治二十一年刊
- 中正社 保守新論 自一號至一〇號合冊 二冊 明治二十一年刊
- 初一〇號明治二十二年一七一號明治二十三年刊
- 大島貞益譯 富田鐵之助校閱 李氏經濟論 全 明治二十二年刊、二十八年二版
- 陳實著 近時政論考 全 日本叢書 明治二十四年刊
- 大島貞益述 情勢論 全 明治二十四年刊
- 三宅雄二郎述 眞善美偽惡醜 日本人 合冊 明治二十四年刊
- 前田正名著 所見 明治二十五年刊
- 明治初期社會經濟思想文獻大要

一六 條約改正及び内地雜居

- 五一七 日報社説 條約改正論 明治三十一年刊
- 五一八 泥堂久之助編述 條約改正 時事切要 明治十四年刊
- 五一九 青田節著 内地雜居之準備 再版 明治十九年刊
- 五二〇 青田節著 内地雜居之準備 再版 明治二十年刊
- 五二一 南村松永道一稿 内地雜居 經濟未來記 一名未來之商人 全 明治二十年刊
- 五二二 吸霞仙史著 内地雜居 街之噂 一名油斷大敵 明治二十年刊
- 五二三 服部誠一先生序 吸霞仙史著 内地雜居 街之噂 一名油斷大敵 明治二十年刊
- 五二四 小野梓著 條約改正論 明治二十年刊(明・文・外交)
- 五二五 原敬著 埃及混合裁判 二部二冊 明治二十二年刊
- 五二六 井上哲三郎著 内地雜居論 全 明治二十二年刊(明・文・外交)
- 五二七 島田三郎著 條約改正論 全 明治二十二年刊(明・文・外交)
- 五二八 山本育太郎編纂 日本外政私議 明治二十二年刊
- 五二九 田口吉著 條約改正論 明治二十二年刊(明・文・外交)
- 五三〇 明治二十二年刊(明・文・外交)

一八九 (七七五)

明治初期社會經濟思想文獻大要

- 五三一 馬場辰猪著 條約改正論 明治二十三年刊(明・文・外交)
五三二 井上哲次郎著 明治二十四年刊(明・文・外交)
五三三 內地雜居續論 明治二十五年刊
五三四 原敬著 現行條約論 明治二十五年刊
五三五 自由黨々報局 黨報號外
五三六 內地雜居論 明治二十五年刊
五三七 紫尾寛太編纂 第一輯尙早派の部 明治二十六年刊
五三八 內地雜居可否論纂 明治二十六年刊
五三九 國友重章著 條約改正及內地雜居 一名內地雜居尙早論 明治二十六年刊
五四〇 每日新聞第四千七百一十一號附錄八月二十二日
五四一 內地雜居の利害及び其實施の方法 明治二十六年刊
五四二 井上圓了先生新案 明治二十六年刊
五四三 雜居準備 僧弊改良論 附錄佛教改革私見 明治三十一年刊
五四四 遠藤柁次君閣 茨城縣齋藤俊齊著 明治三十一年刊
五四五 雜居寶鑑 條約集覽 完 明治三十二年刊三十三年三版
五四六 新編三郎編輯 雜居準備 國民法典 全 明治三十二年刊三十三年訂正再版
五四七 卯九會編纂 明治三十二年刊
五四八 內地雜居ニ對スル諸大家之意見 前集 明治三十二年刊
五四九 岡田常三郎編輯 川上紫山君校閱 明治三十二年刊
五五〇 國民必讀 內地雜居心得 甲 明治三十二年刊

一七 基督教問題

- 五五〇 英國サー・トーマス・モール氏著 日本井上勸譯 明治二十六年刊
五五一 眞政府談 完 明治二十六年刊
五五二 ボール・ウエルニエ著 川島忠之助譯述 明治二十六年刊
五五三 虛無黨退治奇談 全 明治二十六年刊
五五四 尖戸義和譯 明治二十六年刊
五五五 ウォルセイ氏 古今社會黨沿革說 卷一 明治二十六年刊
五五六 大井憲太郎君著 時事要論 全 明治二十六年刊
五五七 大井憲太郎君著 自由略論 全 明治二十六年刊
五五八 ハ・マ・エット述 青山大太郎譯 明治二十六年刊
五五九 災害救濟論 明治二十六年刊
五六〇 平田東助君 杉山孝平君合著 明治二十六年刊
五六一 信用組合論 明治二十六年刊
五六二 エッゲルト著 織田一譯 明治二十六年刊
五六三 斯波貞吉著 國家的社會論 明治二十六年刊
五六四 ウォルリッアム・ハーパー・ド・ジョン著 明治二十六年刊
五六五 國家社會制 明治二十六年刊
五六六 板垣退助君序 中江篤介君序 明治二十六年刊
五六七 板垣退助君著 江口三省君譯 明治二十六年刊
五六八 社會問題 前編 明治二十六年刊
五六九 宇國博士政治學士・マイエット著 明治二十六年刊
五六〇 齊藤鐵太郎 藤井善行 曲淵景章 明治二十六年刊
五六一 日本農民ノ疲弊及其救済策 完 明治二十六年刊
五六二 垣田純助發行 平民叢書第六卷 明治二十六年刊
五六三 現時之社會主義 明治二十六年刊
五六四 ダブルユー・スタシレー・ジエブونس 明治二十六年刊
五六五 明治初期社會經濟思想文獻大要 明治二十六年刊

一九〇 (七七六)

- 五四三 中村正直訓點 米國丁題良著 明治十四年刊
五四四 天道源原 全 明治十四年刊
五四五 信行禪師著 破邪顯正論 全 明治十五年刊
五四六 垣上綠譯 英國無名氏著 明治十七年刊
五四七 耶蘇開明新論 明治十七年刊
五四八 ゴールドン演述 佛教類むに足らず 明治十八年刊
五四九 小崎弘道著 政教新論 明治十九年刊
五五〇 本田瑞樹先生著 明治二十年刊
五五一 一叱天震一叱地動 耶蘇教審判 明治二十年刊
五五二 井上圓了著 佛教活論本論 明治二十年刊
五五三 井上哲次郎著 基督教ト國家 明治二十二年刊
五五四 井上哲次郎著 教育と宗教の衝突 明治二十六年刊
五五五 關學作編輯 明治二十六年刊
五五六 一名「教育と宗教の衝突」顛末及評論 明治二十六年刊
五五七 關學作編輯 收結編 明治二十六年刊
五五八 井上博士と基督教徒 收結編 明治二十六年刊
五五九 一名「教育と宗教の衝突」顛末及評論 明治二十六年刊

一八 社會問題

わが國の維新以後の社會問題は、先づ封建的社會體制の崩壊による武士層の問題であり、次いで、農民問題であつた。近世的工業労働者問題は、明治二十代並にその以後において、起つてゐる。いま社會問題文獻について、は、かくの如き事情から、明治三十七年まで收録する。

- 五六八 乾坤一布衣著 最暗黒之東京 明治二十六年刊
五六九 井上哲次郎著 英國今日之社會 明治三十年刊
五七〇 川上清君著 労働保護論 明治三十年刊
五七一 乾坤一布衣著 社會百方面 明治三十年刊
五七二 グスターフ・シェーンベルヒ著 依田昌言譯 明治三十年刊
五七三 國家經濟論 明治三十年刊
五七四 田島錦治先生著 明治三十年刊
五七五 日本現時之社會問題 明治三十年刊
五七六 リギョール著 前田長太譯 明治三十一年刊
五七七 日本主義と世界主義 全 明治三十一年刊
五七八 福井準造著 近世社會主義 明治三十一年刊
五七九 桑田熊藏先生著 明治三十一年刊
五八〇 歐洲労働問題の大勢 明治三十二年刊
五八一 豐原又男著 資本と労働の調和 明治三十二年刊
五八二 ガルスト單稅太郎著 單稅經濟學 全 明治三十二年刊
五八三 横山源之助著 日本之下層社會 明治三十二年刊
五八四 羽田久松義典著 近世社會主義評論 明治三十二年刊
五八五 羽田久松義典著 側面照射社會燈 明治三十二年刊
五八六 安部磯雄著 社會問題解釋法 明治三十二年刊
五八七 羽田久松義典著 社會研究新論 全 明治三十四年刊
五八八 世界之大問題 社會主義概評 明治三十四年刊
五八九 柳瀨勲介君遺著 權藤震二君補 明治三十四年刊
五九〇 社會外之社會 權藤震二君補 明治三十四年刊
五九一 幸徳秋水著 長廣舌 明治三十五年刊

明治初期社會經濟思想文獻大要

五八八	狹堂先生著 社會學講義 全	明治三十五年刊
五八九	土田弘敏編著 貧民救助論 完	明治三十五年刊
五九〇	煙山專太郎編著 近世無政府主義	明治三十五年刊
五九一	矢野龍溪著 四版 新社會	明治三十五年刊
五九二	ラブレール氏原著 寺内淳二郎君譯	明治三十五年刊
五九三	グスターフ・シェーンベルグ著	
五九四	工業的勞働者問題 完	明治三十五年刊
五九五	同文館發行 經濟世界臨時增刊	明治三十五年刊
五九六	附錄歐洲各國工場法要領	
五九七	足尾銅毒被害救濟會報告書	明治三十五年刊
五九八	江森泰吉編輯 膨脹の日本臨時增刊	明治三十五年刊
五九九	第拾回議會に於ける鐵道問題	明治三十五年刊
六〇〇	議員の質問と政府の答辯	明治三十五年刊
六〇一	獨逸社會史	明治三十五年刊
六〇二	安部磯雄著 社會主義論	明治三十五年刊
六〇三	狹堂先生著 社會學と哲學	明治三十五年刊
六〇四	久松義典著 社會學問答	明治三十五年刊
六〇五	龍溪矢野文雄先生講話	明治三十五年刊

一九 婦人問題

六二一	阿莫斯氏著 鈴木義宗譯	明治十一年刊
六二二	婦女法律論 全	明治十一年刊
六二三	英國大博士密爾氏著 深間内基譯	明治十一年刊
六二四	男女同權論	明治十一年刊
六二五	井上直女史編纂 日本婦人論 全	明治十一年刊
六二六	内山正如編輯 日本之女子	明治十一年刊
六二七	成瀬仁藏著 増補 婦女子乃職務	明治十一年刊
六二八	柳浪子稿 女子參政論中樓	明治二十二年刊
六二九	我國婦人女子の地位改良を論じ	明治二十二年刊
六三〇	併せて歐米婦人女子の地位に論及す	明治二十二年刊
六三一	ケイト・バイアム・マリーチン氏合著 榎本梅三郎譯	明治二十二年刊
六三二	歐米婦人之狀態	明治二十五年刊
六三三	丹靈々居士著 國母論 完	明治二十五年刊

二〇 日本の史的考察

六三一	椒山野史著 近世史略 上、中、下三冊	明治五年刊
六三二	修史局編輯 明治史要 第一編	明治九年刊
六三三	修史局編輯 明治史要附錄概表	明治九年刊
六三四	田口卯吉著 日本開化小史 卷之一、二、三、四、五、六	明治十一年刊
六三五	卷一 明治十一年刊 卷二 明治十五年刊 卷三 明治十六年刊 卷四 明治十四年刊 卷五 明治十四年刊	

明治初期社會經濟思想文獻大要

六〇五	社會主義全集	明治三十六年刊
六〇六	矢野龍溪著 通俗新社會	明治三十六年刊
六〇七	米國エドワード・ベラミー原著 平井廣五郎譯述	明治三十六年刊
六〇八	社會小説 百年後之社會	明治三十六年刊
六〇九	神戶正雄述	明治三十六年刊
六〇一〇	十九世紀に於ける社會主義及社會的運動	明治三十六年刊
六〇一一	依藤軒主人著	明治三十六年刊
六〇一二	社會主義新小説 文明の大破壊	明治三十六年刊
六〇一三	高橋五郎著 社會主義活潑	明治三十六年刊
六〇一四	幸徳傳次郎著 社會主義神髓	明治三十六年刊
六〇一五	佐藤千鶴著 社會新策	明治三十六年刊
六〇一六	社會改良實論 完 小栗貞雄著	明治三十六年刊
六〇一七	妊娠制限の必要及妊娠補助の實行法生殖作用に對する警告及び妊娠補助の實行法實來寬一著	明治三十七年刊
六〇一八	塚原滋樹園作 虛無黨	明治三十七年刊
六〇一九	茅原華山著	明治三十七年刊
六〇二〇	向上の一路 社會主義の新福音	明治三十七年刊
六〇二一	西川光二郎著 土地國有論	明治三十七年刊
六〇二二	田添鐵二著 經濟進化論	明治三十七年刊
六〇二三	塚原端著 虛無黨	明治三十七年刊
六〇二四	堀口勤次郎著 勞働問題	明治三十七年刊
六〇二五	教育者及國家社會主義	明治三十七年刊
六〇二六	ウイリアム・ムル・キユー原著 松居松葉譯	明治三十七年刊
六〇二七	虛無黨奇談	明治三十七年刊

六三五	渡邊修次郎著	明治十二年刊
六三六	明治開化史 全	明治十四年三版
六三七	渡邊修次郎著 日本外交始末 全	明治十三年刊
六三八	上野尚志編輯 國勢變革提要 全	明治十三年刊
六三九	渡邊修次郎著 民情如何	明治十四年刊
六四〇	拔山先生批評 木瀧清類論述	明治十六年刊
六四一	明治六雄八將論 全	明治十六年刊
六四二	細川廣世編輯	明治十六年刊
六四三	增補改正 日本帝國形勢總覽	明治十六年刊
六四四	渡邊修次郎著 明治時勢史 第一編	明治十六年刊
六四五	山脇之人編輯 維新元勳十傑論	明治十七年刊
六四六	鈴木大編纂	明治十七年刊
六四七	明治前記 全	明治十七年刊
六四八	修正明治史要 自第一編至第四編	明治十八年刊
六四九	細川廣世編輯 明治政覽 完	明治十八年刊
六五〇	福井淳編輯 繪本明治太平記 全	明治十九年刊
六五一	岡本武雄著	明治十九年刊
六五二	王政復古戊辰始末 上、中、下、四冊 明治廿一年刊	明治廿一年刊
六五三	鮑堂老樵批評 南城外史跋言 學堂居士演著	明治廿一年刊
六五四	大日本帝國之行末 全	明治廿一年刊
六五五	勿來先生校 黃族逸史稿	明治廿一年刊
六五六	諷世寓意薩長土肥 全	明治廿一年刊
六五七	小林雄七郎著 薩長土肥 全	明治廿一年刊
六五八	火水風人 秦政治郎著	明治廿一年刊
六五九	日本政體史	明治廿三年刊
六六〇	安原指三編 明治政史 十二冊	明治二十四年刊

明治初期社會經濟思想文獻大要

- 六五三 宮川孫三郎編輯 明治新政譚 全 明治二十四年刊
六五四 竹越與三郎著 新日本史 上中 明治二十四・五年刊
六五五 福地源一郎著 幕府衰亡論 明治二十五年刊大正十年改版
六五六 海江田子爵親話 平陽學人西河稱述
維新前後 實歴史傳 一・一〇 一〇冊
六五七 渡邊修二郎著 世界ニ於ケル日本人 明治二十五年刊
六五八 坪谷善四郎著 明治歴史 二冊 明治二十六年刊
六五九 渡邊修二郎著 我國之前途 明治二十七年刊
六六〇 櫻井吉松著 草莽危言日本之社會 明治二十七年刊

二二 征韓論・西南役・朝鮮問題

- 六六一 佐田白茅編 征韓評論 明治八年刊(明・文・雜史)
六六二 佐田白茅著 征韓論の舊夢談 明治三十六年刊(明・文・雜史)
六六三 蕃地事務局編 處蕃趣旨書 明治八年刊(明・文・外交)
六六四 多田直繼輯 朝鮮軍記 明治八年刊
六六五 鹿兒島縣編輯 丁丑亂概 乾坤 二冊 明治十一年刊
六六六 吉川政典編輯 鹿兒島縣發報 第一號、第二號 二冊 明治十年刊
六六七 村井靜馬編輯 鹿兒島記事 上下一冊 明治十年刊
六六八 竹內榮久編輯 探誠夢復路之内 鹿兒島事件の卷一 明治十年刊
六六九 沼尻經一郎編輯 探誠夢復路 二、三、四 三冊 明治十年刊

一九四 (七八〇)

- 六七〇 竹內榮久編輯 鹿兒島事件の卷五、七八 全一冊
六七二 秋元房次郎編輯 繪本鹿兒島軍記 明治二十年刊
六七三 松坂屋板 鹿兒島戰爭道樂寺 明治十年刊
六七四 井澤菊太郎編輯 繪入鹿兒島征討全記 明治十年刊
六七五 村山義行編輯 山本園衛編纂 明治十五年刊
六七六 星野良吉編輯 日韓紛議政略纂論 明治十五年刊
六七七 林吉藏編輯 朝鮮變報 第一一六號 六冊 明治十五年刊
六七八 朝鮮京城事變始末書 明治十八年刊(明・文・外交)
六七九 在帝國大學宮内金平著 大道奇觀 支那革命史 明治二十五年刊
六八〇 森本藤吉著 大東合邦論 明治二十六年刊
六八一 朝鮮革新策 全 明治二十七年刊
六八二 岡田庄兵衛編輯 一名日清開戰論 明治二十七年刊
六八三 東洋一大波瀾 日清開戰朝鮮事件 明治二十七年刊
二二三 文明又は政治小説
六八四 武田交來錄 明治十四年刊
任天主人校閱 粟屋關一譯述 セー子ット・タッキ一著
同天傳蹟佛國美談 明治十七年刊二十年三版

- 六八二 愛花情史戲著 情天比翼錄 明治十七年刊
六八三 菊亭香水著 慘風悲雨世路日記 全 明治十九年刊
六八四 尾崎行雄著 經世偉勳 前後編 明治丙戌刊
六八五 愛花仙史閑 田中清風著 明治二十年刊
六八六 政海波瀾 官員氣質 明治二十年刊
六八七 軒屋主人校閱 風月散人編述 明治二十年刊
六八八 ドンペイ氏同男著作 大石高德君纂譯 伊藤重固君校閱 明治二十年刊
六八八 改良小説 奇遇魯國美談 明治二十年刊
六八九 手山良介著 日本新世界 明治二十年刊
六九〇 咄々怪人校閱 東海道人補編 明治二十年刊
六九〇 非自由結婚談 戀之夜嵐 明治二十年刊
六九一 鶴堂牛山良助著 社會小説 日本之未來 明治二十年刊
六九一 デュール・ベル子氏原著 井上勤譯 明治二十年刊
六九二 政治小説 佳人之血淚 明治二十年刊
六九三 杉山藤次郎著 女權美談 文明之花 明治二十年刊
六九三 浦の家霞閣 竹軒居士編 明治二十年刊
六九四 歐洲奇獄 珍事のはきよせ 明治二十年刊
六九五 鐵腸末廣居士著 時事小説 落葉之掃帚 明治二十年刊
六九五 南翠外史著述 一簪一笑 新粧之佳人 明治二十年刊
六九六 杉山藤次郎編輯 文明之花 明治二十年刊
六九七 松の屋美ご里著 新舊思想 教育鏡 明治二十年刊
六九八 嵐峰松木董宣著 政治小説 芳園之嫩芽 明治二十年刊
六九九 東洋高安主人著 明治二十年刊

- 七〇〇 政海情波 寒やの月 明治二十年刊二十一年再版
七〇〇 骨皮道人笑閑 白笑居士輯錄 寓意諷諷 當世滑稽文章 明治二十年刊
七〇一 松の屋みどり著 一名書生の慰み 明治二十年刊
七〇二 北山逸民題辭 池々子著 明治二十一年刊
七〇三 剛膽之商人 明治二十一年刊
七〇三 櫻田百衛遺稿 舟雪居士校閱 阿國民造 自由之錦袍 明治二十一年刊
七〇四 雪の屋だるま著 既往未來金蘭答緣 明治二十一年刊
七〇五 柴の舎さぼろ著 征鴻歸燕 孤島の明月 明治二十一年刊
七〇六 松の家美ご里著 一讀三嘆 飛鳥川 明治二十一年刊
七〇七 瘦瘠亭骨皮道人戲著 迷土通眞 誤多草裁判 明治二十一年刊
七〇八 小石居士閑 奔雷道人著 明治二十一年刊
七〇九 明治笑談 太平俱樂部 明治二十一年刊
七〇九 岡本純著 未來の都 明治二十二年刊
七一一 松の屋美ご里著 優委貞操 佳人 明治二十二年刊
七一一 柳浪子著 女子參政 蟹中樓 明治二十二年刊
七一二 末廣鐵腸居士著 政治小説 明治四十年の日本 明治二十六年刊

二三 雜

- 七二三 外史局編纂 明治手巾 布告全書 一一〇 一一ノ上、中、下 明治二十年刊

明治初期社會經濟思想文獻大要

明治初期社會經濟思想文獻大要

七二四	大澤清臣著 三條演義	一三冊	明治五年刊
七二五	日本郡國一覽 改正 全		明治六年刊
七二六	書籍會社藏版 府縣名		明治五年刊
七二七	原田義長製圖 日本里程圖		明治九年刊
七二八	鳥獸獵免許取締規則	上下 二冊	明治七年刊
七二九	明治六年四月十五日 神奈川縣參事高木久成		
七三〇	司法省編 新律綱領改定條例 對比合卷		
七三一	神奈川縣參事高木久成 卷一 卷五 五冊		明治七年刊
七三二	近藤圭造編輯 聽訟指令 一 一五		明治七年刊
七三三	近藤圭造編輯 新律綱領改定條例合卷註釋	一冊	明治八年刊
七三四	櫻洲山人中井弘著 漫遊記 上、中、下卷	五冊	明治九年刊
七三五	土屋廣次編輯 改正官民必携 全		明治十年刊
七三六	大政官記録掛刊行 特命全權大使 米歐回覽實記	第一 一五編 五冊	明治十一年刊
七三七	荒木利康編輯		明治十一年刊
七三八	溫故纂要 卷一、二 二冊		明治十一年刊
七三九	武田交來錄		明治十三年刊
七四〇	冠松眞土夜暴動 前編上下		明治十三年刊
七四一	山田澤馬編輯		明治十三年刊
七四二	地方官會議傍聽錄 一 一七號		明治十三年刊
七四三	岡本經朝著 幸福のたね		明治十三年刊
七四四	金井壽繼 竹内信一編輯		明治十三年刊

一九六 (七八二)

七三二	改正徵兵免否要錄 附願屆書式	明治十四年刊
七三三	清水佐兵衛編輯 古今無類 壓制の慘狀 印度の虐政 全	明治十六年刊
七三四	仁田桂次郎著 洋學軌範 全	明治十七年刊
七三五	宇都宮康次郎著 愛國餘談	明治十七年刊
七三六	清水市次郎編輯 華盛頓軍記	明治二十年刊
七三七	城池武宇聯氏原著 濱田健二郎校閱 山口莊吉譯補	明治二十年刊
七三八	比斯馬古公實傳 蓋世之偉業 完	明治二十年刊
七三九	茨城縣會議長 秋場庸開申 全	明治二十年刊
七四〇	夢遊居士校閱 鯨龍居士著述	明治二十年刊
七四一	不平哲學	明治二十一年刊
七四二	明治會 設立大意並規約	明治二十一年刊
七四三	福井先生編輯	明治二十一年五月
七四四	志士感激 歐米太平記	明治二十一年刊
七四五	北畠道龍師口述 久山即 長晴登正校	明治二十二年刊
七四六	告政治家及宗教家	明治二十二年刊
七四七	生江孫太夫編輯	明治二十四年刊
七四八	地價修正ニ對スル會津人ノ意見	明治二十四年刊
七四九	栗本鈞雲先生著 砲臺十種	明治二十五年刊
七五〇	ほるつ江んごるふ氏原著 關澄藏先生譯述	明治二十五年刊
七五一	隨感隨錄 時事漫評	明治二十五年刊

附記

書名下に例へば(明・文・經濟)とあるは、明治文化全集經濟篇の中所収を示し、*を附したるものは、筆者所蔵の外に、明治文化全集所収を示す。

前號 (第三十卷) 目次

●明治初期社會經濟思想史への序論	加田 哲二
●英國資本主義の成立過程序論	野村兼太郎
●ジャン・メリエとその『遺書』	平井 新
●爲替清算制度	岩田 似
●井藤半彌著「租税原則學說の構造と生成」	永田 清
●Brutzkus 著 “Economic Planning in Soviet Russia”	氣賀 健三
●本庄榮治郎著 幕末の新政策	加田 哲二

三田學會雜誌

禁轉載

第三卷	編輯者 東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内
第五號	印刷者 東京市赤坂區新町五丁目八十二番地金子鐵五郎
	印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地金子活版所

發賣元 東京市芝區三田二丁目一番地 丸善株式會社三田出張所

發行所 東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内 理財學會

口振替 慶應義塾 芝區三田二丁目二番地 東京一八二〇四番

●一冊定價金五拾錢
●一ケ年分金貳圓九拾錢
●一ケ年分金五圓四拾錢
●郵税金壹錢五厘
●郵税 共

●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限
昭和十一年四月一日印刷納本 每月一回一日發行
昭和十一年五月一日發行